

イースターメッセージ

「二人は走る」

ヨハネによる福音書 20 章 1～10 節

松本敏之 (日本基督教団鹿児島加治屋町教会牧師)

イースターの朝、マグダラのマリアは、イエス・キリストの墓から石が取りのけてあるのを見て、急いでペトロともう一人の弟子のところへ報告に行きました。この二人は別の場所からそれぞれに飛び出し、お墓へ駆けつけます。「二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子のほうが、ペトロより速く走って、先に墓に着いた」(4 節)とあります。報告を聞いたのはペトロが先でしたが、「もう一人の弟子」がそれを追いかけて、追いつきました。「もう一人の弟子」のほうが、足が速かった。恐らく彼のほうが若かったのでしょう。ところが「もう一人の弟子」はお墓に着いても先に入らず、ペトロを待ちました。ようやくペトロが到着し、お墓にはペトロが先に入るのです。ペトロはお墓の中で亜麻布を見ました。そこへ「もう一人の弟子」も入ってきます。彼のほうは見ただけでなく、「見て、信じた」とあります。「信じた」のはこちらが先、ということでしょうか。

おもしろい流れです。二人が先になったり、後になったりしている。競争しているようにも見える。確かにそういう面もあるのです。

ここに登場するペトロと「もう一人の弟子」(ヨハネ?)は、ヨハネ福音書が書かれた当時(紀元 90 年頃)のユダヤ人教会と異邦人教会を象徴していると言われます。キリスト教は、最初ユダヤ人から始まり、異邦人へ伝えられ、広まって行きました。その後は圧倒的に異邦人教会が大きくなっていくわけですが、この福音書が書かれた頃は両方の勢力が拮抗していたと思われまます。ユダヤ人教会は、なお異邦人教会を下に見る傾向があり、逆に異邦人教会は、古い体質のユダヤ人教会を批判的に見る傾向がありました。そうした中、「いや張り合うのではなくて、共に同じ方向を向いて走っているのだ」という認識をもつことが大事でした。

この関係をカトリック教会と 16 世紀から始まったプロテスタント教会に置き換えることもできるかもしれませんが、かつてはお互いに対抗意識が強かったのですが、20 世紀後半以降は、共に歩む宣教のパートナー

として認め合っています。

歴史的、伝統的なプロテスタント教会と、20世紀に生まれた福音派・ペンテコステ派の教会と読むこともできるでしょう。それぞれのよさがあり、刺激し合い、影響し合っています。

欧米の教会と第三世界の教会と読むこともできるかもしれません。これまでキリスト教の中心は欧米であると考えられていました。しかし、現在世界で最もクリスチャン人口の多い地域はラテンアメリカであり、最もクリスチャンが増えているのはアフリカです。アジアでもフィリピンや韓国の教会は元気です。キリスト教の中心は欧米から第三世界に移りつつあるのです。

古い信徒と新しい信徒と置き換えることもできるでしょう。まだクリスチャンになっていない人も含めてもよいかもしれません。違いを超えて、それぞれの良さを尊重しながら、主の喜ばれる平和の実現に向けて、共に手を携えて、歩んでいきましょう。